小松市立南部中学校　B

ある秋の日のことでした。
幸子は暇で暇で暇すぎたので、イモの子イモジン君の家に電話をしました。
プルプルプルプル・・・プルプルプルプル、ガチャッ
イ「はい、もしもし、イモの子イモジンです」
幸「あっ！イモジン君？あのねぇ、今日、暇すぎなんだけど何かしない？」
イ「うん、いいよ。何がいい？」
幸「うーん。じゃあ、秋なんだから、たき火なんてどう？」
イ「わぁ。いいねぇ、いいねぇ。大賛成だよぉ！
それじゃあ、僕の家の近くにある公園でしようよ！」
幸「うん。じゃあ今から行くから待ってて」

幸子は、そう言って電話を切ると、急いでたき火の準備をして家を出ました。
幸「ルンルンランラン！ルルラララン！」
途中、お友達の毒キノコ3兄弟に会ったけれど、幸子は気づかないふりをして、そのまま歩いてゆきました。
毒「幸子ちゃん。こんにちは。なんだかごきげんさんだねぇ」
幸「・・・・・」
毒「幸子ちゃん　反応ないね」
毒「・・・うん。幸子ちゃんはいつもああだからね。
仕方ないよ」
意外と性格の悪い幸子であった。

やがて、幸子はイモジン君と待ち合わせ場につきました。
幸「あの子まだきてないのか。
あっそうだ。せっかくたき火をするんなら、イモ焼きたいね。うん、焼いも。あの子焼いたらうまいかなぁ」

小松市立南部中学校　B

イ「・・・ねぇ幸子ちゃん、あの子って僕のこと？」
幸「ちっちがうちがう。うん、もう断じてちがうよ。うん」
イ「・・・そう・・・」
幸「あったき火しよっ！早く早くっ」
イ「あーそれならもう準備したよ！・・・幸子ちゃんが
　食べたがってたイモも用意したし・・・」
幸「おう、イモジン、準備がいいねぇ。じゃ、始めよっか」
イ「うん」

そして、幸子とイモジンは落ち葉を集めてドサッ、
ライターでカチッ、火をつけました。
ボッ、火をつけた落ち葉からどんどん煙が上がって
きます。モクモク。

しばらくすると、幸子たちのまわりは、おイモのいい
においでいっぱいになりました。
幸「わぁ、いいにおいだね」
イ「そうだね。僕おなかすいてきたよ」
幸子は、まだかな？、まだかな？と思いながら、ずっと
おイモが焼けるのを待っていました。

幸「もう、焼けたかなぁ」
イ「うん。もうそろそろだね」
強い風が吹いてきました。ビュッ、木がザァザァなって
います。
イ「わぁ、強い風ぇー」
幸「（無視）よしっもう食べよっか」
イ「あっちょっと幸子ちゃん。一人で食べないでよぉ」
幸「（無視）あー。おいしい」
イ「ズルーイ、僕も」　　幸（ﾓｸﾞﾓｸﾞ）
イ「ねぇ、イモまだのこってる？」
幸「？まだ、あるんじゃない？」
そう言うと幸子とイモジン君はたき火の方に向きました。

小松市立南部中学校　B

なんと大変、さっきの強い風のせいで、たき火の火が横にあった木々に燃え移ってしまっていたのです。
イ・幸　　「うわぁ！火が木に燃え移ってるよう」
イ「火事レンジャーを呼ばなくちゃ！」
幸・イ　　「助けてぇ！火事レンジャー」

（火事レンジャーレッドさっち）
レ「なんだと！たいへんだ！みんな、火事レンジャーの出動だ！」
火「イエッサァ！」

火事レンジャーがバケツリレーで火を消しています。
全「やっと消えたなぁ」

L「君たち、大人のいない所で火遊びをしちゃいけないよ。分かったかい」
幸「分かった」
イ「ごめんなさい」
青「これからは気をつけるんだよ」
幸・イ　「はーい。ありがとう火事レンジャー」
こうした火事レンジャーの活躍によって、大きな被害を出さずにすんだのだった。
みんなは、必ず大人の人と一緒に、たき火をしようね。